

“Remember 9.11”

忘れないあの日のこと

—— 21年目の秋に

海外生活カウンセラー ^{ふくなが} 福永 ^か 佳津子 ^こ



2022年6月、アメリカ同時多発テロ事件の犠牲者のための慰霊碑にて

あの日、あの地には申し分のない秋空が広がり、凛^{りん}としてそそり立つワールドトレードセンタービルの雄姿をいつそう美しいものにしていった。いつものあたりまえの朝が始まろうとしていたそのとき、狂気の蛮行がビルを引きずり倒し、跡形もなく粉砕しようとはいった誰が想像しただろう。その衝撃の光景に、ニューヨーク市民は息を呑み、目を剥^むき、そして顔を覆ってへたり込んだ。あの日から二十一年目の秋が来た。

プロフィール

上智大学卒。在ニューヨーク6年。マンハッタンビルカレッジで修士号取得(MAH)。ニューヨークWISH日本語電話相談室カウンセラー。帰国後は海外生活カウンセラーとして講演執筆多数。一般社団法人海外邦人安全協合理事。NPO国際人をめざす会副会長、ロングステイ観光学会理事、ジャムズネット日本理事、ゆいグローバルネット共同代表ほか。著書に『カルチャーショック』『ある日海外赴任』『アジアで暮らすとき困らない本』『海外安全ガイド』ほか。



ワールドトレードセンターが攻撃された時間
を記した新聞



グラウンド・ゼロのフェンスにかけられたボード

銀

行マンだった篠原さんは、ワールドトレードセンターの会議室で厳しい議論に晒されていた。よからぬことが起きたことは、甲高い声が飛び込んできて察知した。「とにかく出る。このビルから離れるんだ。急げ！」

篠原さんたちは、わけがわからないままその声に押されて階段に群がり、とにかくひたすら下へ下へと駆け下りた。南棟の窓からは、もろく崩れ落ちる北棟が見えた。その信じがたい光景に思わず足を止め、見入った人たちは、その一瞬の「立ち止まり」で命を失うことになった。とにかく時間との勝負だった。降りきるには相当時間がかかるからとトイレに立ち寄った人たちは、その数分が命取りになった。

篠原さんの脱出はビル倒壊とほぼ同時だった。碎け落ちたコンクリートが粉塵を巻き上げ、空からはおびただしい数の書類が舞い散り、払っても払っても顔に張りついた。事態を把握しようにも混乱がそれを許さなかった。篠原さんは全身を粉塵に覆われながらも、とにかく家に帰らねばの一念で、重たい体をバス停に運んだ。

途中ですれ違った人たちは、全身

が粉塵まみれの篠原さんを見て、「おまえ、すごいぞ。生き延びてきたのか」と駆け寄り、抱きしめてくれたという。誰の目にも倒壊したビルからほうほうのいでで逃げてきた被災者であることは、一目瞭然だった。命綱のバスに乗り込んだ瞬間、篠原さんは意識が遠のく気さえした。

その彼を見て、運転手がすかさず聞いてきた。

「おまえの家はどこだ」

そして居合わせた乗客に向かってこう叫んだ。

「みんな、今日はルートを変更して、まずは彼を家に送り届けてやろうじゃないか。いいだろう？」

「もちろんだ。そうしてやってくれ」

乗客たちは口々に賛成を唱え、励ましの声をかけた。恐怖に震える体を抱きしめてくれた道端の人たち、一刻も早く自宅に帰って体を休めろとルート変更にもろ手を挙げて賛成してくれた乗客たち。篠原さんは、見ず知らずの人たちが寄せてくれた労りの気持ちはずっと忘れられないと言う。

卑怯なテロ行為を断ち切るには、人と人が互いの考えの違いを知って、共生の道を探る努力をすることが大

切だと思いうに至った篠原さんは、その後、人生の軸足を若者たちの留学支援活動に置く決断をした。コロナ禍で海外との接点が極端に狭められた日々を憂いながらも、「外に出て違いを知る力を養え！」と熱いメッセージを送り続けている。

自

分の力を試したいと意を決し、アメリカの大学に進学した白鳥敦さんは、優秀な学業成績を収め、卒業後は実力を高く評価されて、ワールドトレードセンターに事務所を置く名のあるアメリカの企業で働きはじめていた。しかし蜚行は容赦なく三十六歳の命をもぎ取った。

敦さんの安否確認は手間取った。最大の理由は、「日系企業の社員の安否確認は急がれたが、米国籍企業に勤務する日本人の掌握には、誰もがはなから思い至らなかったのでは」と父親は悔しがった。実際、最初の報道で敦さんは五十二歳と報じられている。自慢の息子が軽んじられたようで悲しみはさらに深まった。矢沢永吉の音楽や生き方に絶大な憧れを持っていた敦さん。アパートの部屋に残されたCDと対面し、几帳面な性格そのままのラベリングを見て、また泣いた。白鳥さんは、どうしてこんな残酷な行為ができる

のか、何が理由で蛮行に走ったのか、と答え探しに身もだえし、苦しんだ。その結果、こう思ったと言う。

「卑怯なテロ行為を起こしたことは理由があるはずだ。彼らの言い分も聞かねば」

白鳥さんは、犯人とされたビンラディンに直接会うしかない、なんのツテもアテもないなか、恐怖をかなぐり捨て、はやる気持ちのまま、アフガニスタンに飛んだ。カタールのテレビ局、アルジャジーラに出向いて、手紙を渡せるルートがないかを尋ね、あの山の中がアジトだと聞きつけば、木々をかき分け、突き進んだ。確かな約束とはなるはずもなかったが、とにかくテレビ局の現地特派員に手紙を託して帰国した。

「拝啓ビンラディン様……」と日本語で綴った手紙は、テレビ局がダリー語に訳してくれた。しかしビンラディンの所在は結局わからずじまい。最終的には、米軍に殺害されたことで、答え探しは宙ぶらりんとなってしまった。しかしアフガニスタンを駆けずり回るなかで、現地のさまざまな貧困と劣悪な教育環境を目のあたりにして、白鳥さんは一つの結論を得た。

「子どもたちは、何が正しくて何

をしてはいけないかがわからない。本を読もうにも電気がない。彼らが世界を知り、物事の正悪を知るためには、夜に灯る電気が必要だ」

思い立ったら行動が早い白鳥さんは、さっそく長野県小諸市にある太陽光発電を手がける会社を探し出して協力を依頼。照明と太陽光パネルが一体化したものを仕入れ、アフガニスタンの子どもたちに無償で提供しはじめた。一回の渡航で詰め込めるのは十台がやっと。人頼みはしない。自分で手渡す。そうすることが息子への弔いだと配り歩いた。

白鳥さんは何度目かのアフガニスタン行きの前に思い立って手品を習った。ことは話せずとも子どもたちと心を通わす方法がないものかと考えあぐねてたどり着いたのが手品だったのだ。さっそく公益社団法人日本奇術協会を尋ねた。ご本人はつけ焼き刃のにわかマジシャンと謙遜するが、現地の人が目を見張るほどの技を持ってアフガニスタンに入り、子どもたちとの距離を縮めた。

白鳥さんは十年後二十年後に国を背負う子どもたちになんとか教育の機会を与えられないかとの思いにも突き上げられた。

「九歳の男の子が肩に銃を担いで、敵視するように私を睨んだんです。九歳ですよ。そんな状況があつていはずがない。穏やかで安心できる日常があることを教えてあげなくては」

父親がアメリカ兵に殺された、自分はクラスター爆弾で体の機能が失われた。子どもたちがたぎらせるアメリカへの復讐心をいさめるには教育しかない、学校づくりのための支援活動をも視野に入れて動きはじめている。

アフガニスタンの水不足も深刻の極みだった。しかし自分の身の丈に合わない援助はしないと自分に言い聞かせ、浄水器メーカーの協力を得て高性能の浄水器を乗せたトラックを一台寄付するにとどめた。さらに現地の人に現地に合った井戸の掘り方を教える職人さんたちを送り込むことができないかと模索している。

「アフガニスタンの人たちに寄り添い、復興に生涯をかけた中村哲医師の死が悼まれてならない」と白鳥さん。アフガニスタンにとって緊急の問題は、「政治や軍事問題ではない。パンと水の問題である」という中村医師のことが深く胸に突き刺さる。

白鳥晴弘さんの著書
「息子からの伝言 20年目の9・11心の旅路 健灯商會」



中村医師が言うように、空腹では考える力も湧かない。アフガニスタンの子どもたちが自分の手で稼いで食べていくにはどうしたらいいのか。考えた末、白鳥さんは、なんと自分の飲食店を急仕立てで焼き鳥屋に改築し、アフガニスタンの子どもたちを呼び寄せて焼き鳥の調理法を教える策に出た。

宗教的に豚肉はダメ。でも鶏肉なら口にすることを憚らない。子どもたちに宿も提供して焼き鳥調理の修業をさせたというから、その着眼点と実行力には脱帽するしかない。

私が白鳥さんの話を伺った場所は、その「焼き鳥屋さん」だった。白鳥さんは「何人かの子どもはアフガニスタンに戻って焼き鳥屋を開店させていますよ」と顔をしわくちやににして笑った。

初対面の白鳥さんはお洒落な感じだったので、思わずそのことに触れた。

「いや〜これは敦の服でしてね。アイツ、いいもん着てましたよね」白鳥さんは敦さんを肌に感じながら、その思いまでしっかり羽織って、アフガニスタンの子どもたちが銃を下ろせる日の実現に奮闘している。

留

学をも視野に入れて、ひとりの若者が下見を兼ねた夏旅行を実行していた。ニュージャージー州ニューアーク空港を飛び立ったユナイテッド航空93便に乗り込んだ若者は、留学への夢を膨らませ、サンフランシスコ経由で大阪の実家に戻る帰路にあった。しかし、テロリストに乗っ取られた同機は、ホワイトハウスを、いや連邦議会議事堂を標的にしてワシントンに向けて舵を切っていたといわれている。

同名の映画を「存じだらうか。United 93」は乗客とテロリストたちの戦いを再現した胸に迫る映画だ。そこで描かれたように乗客たちの勇気ある行動がホワイトハウスへの激突を許さず、結果として93便はワシントン手前のペンシルベニアの草原に墜落する悲劇となった。乗客全員が死亡。そしてその犠牲者のなかに、早稲田大学理工学部二年生の久下季哉さん（二十歳）がいた。

悲劇から数年後に私は母親に会っている。会うなり、母親は私の胸を拳で叩いて泣き崩れた。

「ことばも現地事情もわからないなかで立ち往生を強いられた私をどうして助けてくれなかったのか。英文書類を右から左に渡されても、どうやって読み解けというのか」

犠牲者家族を誰がどう手助けすべきたったのか。「補償はしなくてもいい。でも、情報の収集や現地でのサポート体制を国が整えるべきではないか」と白鳥さんは時の小泉総理大臣に直談判している。

久下さんはやっとたどり着いた墜落現場の周辺がおびただしい数の星条旗に覆われていたことに驚愕し、一方で、息子のための日の丸がどこにも見当たらなかったことに愕然とした。母親は外務省職員に「なんとか白い布と赤い布を買って集めて」と頼み、夜なべをして息子のための日の丸を縫い上げている。日の丸のサイズもわからず。真ん中の赤い丸の部分は宿泊先にあったやかんを使って形取ったと言う。

ユナイテッド航空93便



久下季哉さんの母親が夜なべして縫い上げた日の丸

の犠牲者は、四十名。シャンクスビルの墜落現場跡地には、一人ひとりの名前が刻まれた石碑が静かに佇んでいる。二〇一八年の追悼式典でトランプ大統領は、「勇敢な愛国者たちがこの国の敵に立ち向かい、アメリカが誇る不滅の英雄たちの一員となった」とテロリストと戦った犠牲者たちを称えた。

「機内でのテロリストたちとの戦いはまさにアメリカを守るため。がんばった息子を誇らしく思っている。そして私がTOSHIYAの母親なら、と大声で叫びたい思っている」まさに季哉さんはアメリカが誇る不滅の英雄のひとりに違いなかった。コロナでここ二年ほど追悼式典に参加できなかった久下さんのものには、黄色いバラが添えられた季哉さんの石碑の写真が送られ、今年の二月には、93便国立記念碑最高責任者ステ

イーブン・M・クラーク氏より、手紙と日の丸が届けられている。

「折り畳んだ日本の国旗を贈ります。永久記念碑の起工式、竣工式、毎年九月十一日のセレモニーで掲げてきた日本の国旗を、このたび季哉さんに敬意を表して新しいものに置き換えることにしました。米国立公園局を代表し、我々の感謝、そして久下さんの素晴らしい息子さんを称える印として、この国旗を受領していただければたいへん幸いです」

記念碑を建てるにあたって関係者が希望を聞いてきたとき、久下さんはこう即座にお願いしたという。

「つねに日の丸を掲げてください。公園には桜の木を。季哉の石碑には漢字名も」

石碑には、TOSHIYA KUGEと並んで、母親直筆の漢字名、「久下季哉」が彫り込まれている。

今年三月、大阪まで久下さんを訪ねた。この二十年、息子の無念に向き合うために、必死で動き回ってきたという久下さん。白銀色の髪が時の流れと深い悲しみを代弁していた。季哉さんは「大好きなアメリカだよ、留学したら戻らないかも」と言い置いて米国旅行に旅立った。

「ほんとうに帰ってこなくなっち



やった」と久下さんはポツンと言ったあと、「でも大好きなアメリカに眠っているのだから……」と顔を上げ微笑んだ。

「なんでもしました。息子のために。そんな無我夢中のなかで、たくさんの人と出会い、そのことが私を救ってくれました。いまでは、息子が私に感動を運んでできてきている気さえしています」

追悼集会ではブッシュ大統領から、「ほんとうに申しわけなかった」と謝罪され、バイデン副大統領（当時）らがいつしよに写真を撮ろうと声をかけてくれ、折りあることに犠牲者家族に寄り添う場を設けてくれたという。ユナイテッド航空の関係者は、彼らのせいではないのに犠牲者の家族をいつまでも気遣い、自宅に招いてくれたり、トレーニングセンターに連れていってくれたり、現地での通訳を買って出ってくれたりしたそう

だ。「かつてあったアメリカへの憎しみは、時とともに薄れました。毎年欠かさず式典に参加し続けたことで、現地の人たちが自分のことを覚えてくれていて、『TOSHIBAのマザー』と取り囲み、受け止めてくれます。国の隔たりを越えていろいろな関係者や犠牲者家族と交流を深めること

で、私は前を向いて歩くことができます。長い二十年でしたが、同時に感謝の二十年でもありました」

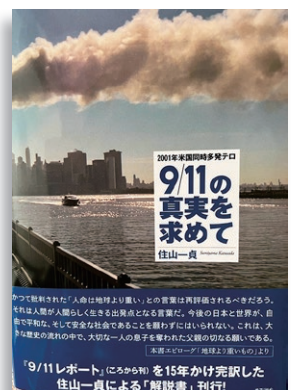
犠 犠牲者家族は、国内にはある「犯罪被害者支援法」が、海外では適用外となっていることをメディアに訴えた。私はその取材現場に立ち会ったことで犠牲者家族を知ることになった。中心になって声を上げていたのは、息子さんを亡くされた住山さんだ。

「追悼式典への参加や各種やり取り、弁護士費用に飛行機代、そしてニューヨーク滞在費等々で老後の蓄えも消えてしまった。海外犯罪被害者家族にも国内同様の手当を」

住山さんは、当時、富士銀行（現みずほ銀行）ニューヨーク支店に勤めていた息子さんを亡くした。享年三十四歳。以来、犠牲者家族のフロントに立って、米国政府や日本政府に物を申ししてきた。どうしてあんな暴挙が行われたのか。その理由を知りたい気持ちは白鳥さんと同じだった。

事件後、何度も日本とニューヨークを往復していたあるとき、ニューヨークの書店で「9・11調査報告書」なる英文書籍を見つけて震えた。ここに求めている答があるはず、と手

住山一貞さんの著書「9・11の真実を求めて」（ころから株式会社）



に取るやすぐさま辞書と首っ引きで文字を追い、来る日も来る日も邦訳作業を続けた。そして七年後の二〇二一年。テロ二十年の節目に、魂の翻訳本を刊行した。さらにこの春には、二十年の思いの丈を綴った渾身の自著を書き上げている。また、悲しみを凝縮した短歌集は英文併記で電子書籍化されており、「一つが完成するたびに、心が少しずつ癒やされました」とことばを定型にはめ込む作業をふり返った。涙なしには読めない短歌が三十篇、収められている。

大学で「危機管理」を教えていた私は、あるとき住山さんご夫妻を教室にお招きした。講義の前の週に「9・11」の話を出したら、学生たちが「え、9・11？ まだ生まれていなかったんで知らないです」と

野幌^{のっぽろ}の林の路に泣きやまぬ
吾子を揺りつつ抱きし日もあり

In my arms,
He didn't stop crying.
I swung him
For a long time on a path under trees.
It was a suburb called Nopporo.

悲しみも嘆きもすべて払はむと
「爆心」の地につむじ風ふく

Carrying my son's bone,
Remaining cherry blossoms
I view at parting.

So as to blow away
Our grief and sorrow,
The whirling wind
Blow strongly
At Ground Zero.

「グラウンド・ゼロの歌」
(22世紀アート)より

ケロッと言つてのけたから
面食らった。

住山さんは悲劇の現場から持ち帰ったビルの残骸の破片をカバンから取り出して、事件のことをゆつくりとした口調でポツポツと話された。私は学生たちがどんな反応をするのか、気が気でなかった。しかし住山さんの話が終わった瞬間、学生のひとりが、箱を持って壇上に駆け寄った。

「これ、みんなで折った千羽鶴です。この秋、ニューヨークの追悼式典に行かれるとき、息子さんの石碑にかけていただければうれしいです。私たちは今日のお話を決して忘れません。ありがとうございます」

事件の風化がなによりも無念だと言われていた住山さんの目が潤んだように見えた。

二 ユーヨークには、すぐ手が届くところに多国籍ホットライン、WISH日本語電話相談室があり、駐在中に私はそこ

でカウンセラーとしてあらゆる相談にあたっていた。

二〇〇一年九月十一日、私は日本で夜十時のNHKニュースを見ていた。「たったいま、ワールドトレードセンタービルに飛行機が衝突しました」とアナウンサーが伝えたまさにその瞬間、背後に映し出されたワールドトレードセンタービルに二機目が突っ込むシーンを見る羽目になった。私は目を疑い、絶句した。ニューヨークの邦人に何かがあれば絶対的な受け皿になるべき存在にあった私が、体を日本に置いていいものか？ 私にできることは何だ。すぐに現地に飛んで、混乱する邦人のヘルプラインの電話口に立つことではないのか。突き上げる思いのまま眠れない夜を過ごし、朝が明けるのを待ちきれない思いでニューヨークの総領事館に電話を入れた。

「WISHの福永です。ホットラインを立ち上げますか？」

折り返しの電話で、「ホットラインはぜひと思うのですが、こちらはいへんな状況でして……。あなたが来て立ち上げてくれませんか」。それだけのやり取りで私は旅支度を急いだ。同時多発テロがいわれ、すべてのエアラインが離発着を見送るなかで、間引きながらも運航を続け

骨一つ負ひて名残の花見かな



ていた米国籍の飛行機を選択する以外に、覚悟のフライトとなった。華やきの代名詞のような成田空港にまったく人気はなく、飛行機はガラガラだった。「窓際？ 通路側？」とカウンターで一応は聞かれたものの、乗り合わせた人は二十人もいただろうか。そしてその多くは、息子が、夫がという悲報を聞いて取るものも取らずに乗り込んだご家族にほかならず、鎮痛な空気が機内を包み、沈黙を余儀なくさせていた。ニューヨークまで十三時間。あまりにつらく悲しい飛行時間だった。

そのとき機内でお見かけした小さな背中を、ニューヨークで開かれた行方不明者家族への支援の会でお見かけした。肩を震わせ、小刻みに揺

れる体を丸めて、顔を覆っておられたその後ろ姿に、非力で無力な自分を嘆き、だからこそ私がやれることを探さねば、と奮い立った。その一つがレッドクロス

希望者の列であふれていた。自身のIDを示し、面接では、「肺は強い？ 粉塵が舞う現場よ。大丈夫？ 重たい荷物は持てる？ ミネラルウォーターを運ぶ体力がある？」などなど

と聞かれ、「強靱な心臓と体力の持ち主です」と怯まずに答えたら合格した。レッドクロス・ボランティアの心得のレクチャーでは、「現場で見聞きしたことを絶対に他言してはならない。被災者家族の写真を撮ってはならない」の二点を強く念押しされ、宣誓を経て、ボランティア証が渡された。

昼間はホットライン。夜はネットカフェから新聞の連載記事（当時読売新聞でコラムを連載しており、デスクから「ニューヨークにいるなら毎日記事を送れ」となった）を書い

て送るという時間割では夜中しか体が空かない。そこで深夜の0時から明け方六時までのボランティア枠を引き受けた。課せられた役割は、不眠不休で行方不明者の捜索や救出にあたっていた警察官、消防士、緊急救助部隊、ボランティア等のメンバーの食事の世話だった。せっかく体をニューヨークに運んだものの、なんでもやらなくちゃ。そして私も不眠不休の日々となった。

もらったばかりの赤い十字のマーク入りIDを首にかけたまま地下鉄に乗りうとしたら、「あ、レッドクロス

の人は、料金は不要ですよ」と駅員に言われた。空腹を満たそうと立ち寄ったタイムズスクエアのイタリアンレストランでは、着席するやいなや、蝶ネクタイ姿の支配人がひざまずいて、こう言った。

「ミセス。あなたはレッドクロスのボランティアですね？ 本来ならば私こそ店を閉めてボランティアに駆けつけるべきところを、私に代わって力を尽くしてください。あなたから、お食事をいただくわけにはいきません。一階に特別にお席を用意しています。今回の救援にかかわってくださっているすべてのかたに一日何回でもなんなりと召し上

がっていただきたいのです」

店の入り口には「店の一部を救援メンバーに提供します。そうすることとは当然です」という張り紙があった。ミュージカルの舞台も、レッドクロスのボランティアには半額割引が適用された。「根を詰めていたら、あなたこそまいっちゃうわ。ミュージカルで気分転換をしてください」というのが劇場側からのメッセージだった。できる人ができるときにできることで人の助けになる。まさに本場のボランティアの奥義を知ることになった。

ニューヨークの常宿は、ビッグアップルというドミトリード。圧倒的に十代、二十代のバックパッカーが利用する簡易宿。紙シートに紙毛布で枕なしの粗末な宿は秋に入つたニューヨークではうす寒かったが、そのベッドに体を横たえる暇もあるかないかの私には十分だった。二段ベッドが二組。合計四人が一部屋に寝泊まりする。その上段の一つに、ひとりの日本人女性が泊まりはじめた。

「悲報を聞いて、語学留学先から飛んできちゃいました。私は日本では看護婦。きつとできることがあるはず」

追悼集会のサポートなどで活躍した彼女は、のちに「テロリズムと災害医療／全米から集まったナースの行動力とメンタルヘルスケアの重要性」と題した報告書を書き上げ、「災害医療」を専攻すべく、ハーバード大学に学びの場を求めた。彼女もまた一つの惨劇を経て、被災者救援に向き合うべく人生の軸足を大きくシフトさせたひとりだった。

四十二丁目の角にマダムタツソーという蠟人形館がある。歩道側には



日本人建築家、曾野正之氏が建てた慰霊碑

月がわりで「時の人」の蠟人形が飾られるのだが、テロ直後に置かれたのは、ブッシュ大統領像だった。彼が、「いまこそアフガニスタンと戦争だ」と拳を挙げて戦争突入を宣言したがゆえの「時の人」だったが、通行人たちは通りざまにブッシュ像の頭をこづいてこう言った。「頭を冷やせ。戦争をしたいのはおまえだけだ」「罪のないアフガニスタンの人たちを犠牲にしたいのか」。マンハッタンの目抜き通りでは、「戦争反対。アフガニスタンの子どもたちを守れ。恨み恨まれの負の連鎖はもうたくさん」と「戦争反対」を掲げた横断幕の行進が長い列をつくっていた。

マンハッタンの対岸にあるスタテンアイランドには二枚の羽のように見える白い追悼碑が崩壊現場を真つすぐ見据える形で立ち、空の青さに映えて息を呑む美しさだ。その追悼碑を建築家の曾野正之氏が、そしてそこに彫り込んだ犠牲者の横顔を彫刻家の岡利彦氏が彫り上げ、五年目の追悼式典に間に合わせている。

「当時このテロが起きていたら、父は犠牲になっていたかもしれない」

幼少期をニューヨークで過ごした曾野さんならではのブレゼンテーションが市民の心を打ち、世界中から三〇〇人近い建築家が競ったコンペティションで見事に指名を勝ち取った。

米国の栄華と権威の証しといわれた世界屈指の美しいビル、ワールドトレードセンターの設計者も、日本人のミノルヤマザキ氏だと知る人は少ない。日本人の技術なくしては建ち得なかったと賞賛されたシンボルトワーは、「打ち砕かれ崩壊したとき、周囲に倒れ込まず、ビルの内部に向かって崩れ落ちた。日本人の技術はどこまでも素晴らしい」とスペインの新聞に絶賛されている。

市民のなかには「ワールドトレードセンターの歴史を始めたのも閉じたのも才能ある日本人だった」と言う人さえいた。

犠牲者家族は、起きた事実には逃げずに向き合おうとするその過程のなかで、思いもよらなかった新たな出会いに心を癒やされてきた。仲間たちの心の中に亡き息子、夫、父が確かな記憶として生き続けているいくつかのエピソードが犠牲者家族の悲しみを和らげてもくれている。

久下季哉さんの母校、大阪府立北

野高校では彼の守ったサッカーゴールの近くに季哉さんの年齢と同じ樹齢のクスの木が植樹され、「生きた証し」として、また「平和を願うシンボル」として友人や後輩たちに守り育てられている。白鳥敦さんの米国仲間のひとり、生まれた子どもたちの名前にAtsushiのAとSを入れて、「敦を生き返らせてくれている」と白鳥さん。

犠牲者家族の一人ひとりが突きつけられた「事実」をしつかり受け止めて、込み上げる思いを正直に発信してきたことは書き綴った通りだ。何通りもの「悲しみの乗り越え方」の事例に触れる機会を得て、私たちは人の心の強さと深さに圧倒されたはずだ。もぎ取られた尊い命に心を寄せ、犠牲者家族の悲しみに近づくために私たちができることがあるとすれば、それはあの惨劇を決して忘れないことにはかならない。

“Remember 9.11”。グラウンド・ゼロの跡地のフェンスに長く掲げられていたメッセージボードが祈りを込めて静かに語っていたことを思い出す。そう、忘れない。あの日のこと。彼らが生きていた証しを。そして涙を拭い、顔を上げ、前に進んでこられた犠牲者家族のことを。